

山と博物館

第 8 卷 第 2 号

1963年2月25日



あかつくしがも (雌)

撮影 平林克敏

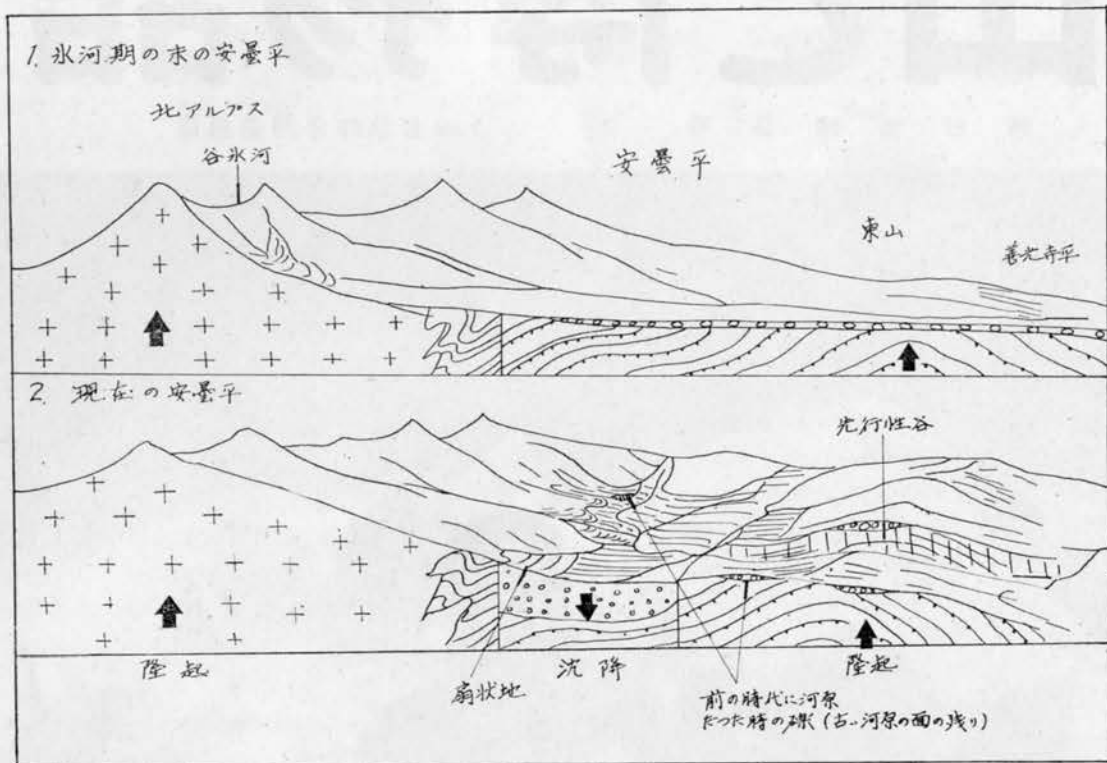
ヒマラヤ、アビへ遠征の途中7000メートル付近で死んでいたカモンズーンで死亡したものと思われる。——注 平林克敏

産卵期は4月中旬～6月中旬で巢は岩隙、土穴、樹洞等に羽、縮羽、少量の小枝で作る。チベットでは4900mの高所で営巢した記録がある。主として北アフリカ、中央アジア、シベリヤ、モウコ、満州、チベットで蕃殖し、冬期は南ヨーロッパ、北アフリカ、インド、ビルマ、中国に渡り、日本では極めて稀である——注羽田健三

大 町 山 岳 博 物 館

『竜の子民話』によせて

太田昌秀



1 犀龍(さいりゅう)の話

私がたしか小学校2年生のときのことだったと思う。学年全員が先生につれられて、仏崎の観音様へ遠足にかけた。春先であったような気がする。私は、高根の生れなので、高瀬川でよく水泳をしたり、観音橋をはさんで常盤の子供とケンカをしたものであった。しかし、十才位の子供の行動半径としては、観音様まで足をのぼすことはなかったので、この遠足は、楽しい冒険でもあった。

観音様の本堂の裏には、高い狭い石段があって、その上に深い洞穴がある。こゝには、昔から犀龍(さいりゅう)が住んでいるのだと聞かされていた。私の母は、ちいさい頃、こゝへ遠足にきた時、友人がこの石段を転げ落ちて血まみれになったという話をよく私に聞かせてくれたことがあったので、この洞穴は、私にとっては、薄気味の悪い近づき難いところであった。

私達の遠足は、観音様の境内や競馬場で一休みしてから、本堂の裏山へ登った。この山の中腹には荒れたお堂が一つ立っていて、ここから眺める安曇野の北部はとても素晴らしいパノラマであった。白く広い河原をつくって流れる高瀬川の向う岸に、自分達の生れ育った村の家

々の森や林がちらばってみえ、水を張った水田が、鏡のように光を反射していた。

みんなは、この古ぼけたお堂のまわり集って、自分達の住む村や街をはるかに見下ろしながら、本堂の裏の洞穴に住んでいたという「犀龍の話」を聞かせてもらった。

——…… 大昔、今目の前に広がっているこの安曇平は、一面の湖で、アルプスおろしに吹きよせられる波は、ちょうどこの観音様の付近の湖岸にまで打ちよせていました。その頃、この地方に住んでいた人達は、この湖で魚をしたり、山で獣を追ったりして暮しをたてていたのです。ですから、今でも、西山や東山のふもとの小高いところに、昔の人が使った土器や、ヤジリ石などが掘り出されることがありますが、盆地の真中ではけっしてみつかりません。そこは昔、湖の底だったからなのです。この広い湖には、年老いた犀龍が一人住んでいてそれがこの湖の主でした。「犀龍」というのは、犀のように額に角がある竜だったということです。

そのころ、この湖の岸の村に、一人のみなしての少年が住んでいました。この子は、人並以上に体も大きく知恵もあり、真面目な強い少年で、泉小太郎という名前

でした。この少年は、親切なおばあさんに養われ、湖のほとりの貧しい村ですくすくと育ちましたが、年をとるに従って、自分達の村がどうしてこんなに貧しいのだろうと考えるようになりました。毎年、雪解けの頃や、台風の時などには大水が出て、湖の水が溢れ、沢山の家が流されたり、耕地が水浸しになりました。小太郎はこの様子を見て、この湖がなかったら、人々はどんなに幸せに暮せることだろうと考えました。こんなことを考えながら暮しているうちに、ある時、村の予言者である占師が、小太郎の身の上を話してくれました。——昔、この湖のほとりに、一人の勤勉な若者が住んでおりました。この若者は、湖畔でとても美しい娘に会い、その娘を嫁にしました。そして、二人は幸せに暮し、一人の男の児ができました。それから間もなく、若者は山へ仕事にでかけたまま帰らず、いつとはなしに、死んでしまったと噂されるようになりました。残された妻は非常に嘆き悲しみました。その悲しんでいる姿をのぞき見た村人はその美しい女が、実は怖ろしい犀竜であることを知ってびっくりしました。この女は、実は、湖の主、犀竜だったのですが、美しい娘に化けて、人間と結婚したのです。それが夫の死を知って悲しみのあまり、自分の本当の姿を現わしてしまい、それを村人に見られてしまったのです。女は、自分のみにくい姿が人の眼にふれたことを恥じて、一人息子を近所の老婆のもとに託し、仏崎観音様の裏山の深い洞穴にかくれてしまったのです。その時残された子供が、泉小太郎、お前なんだよ——と占師は教えてくれたのです。

小太郎は、自分の母親が犀竜であったと聞いて、驚き悲しみ、恥かしく思いました。けれども、母親がこの湖の主であったことを思い出して、自分の母親に頼んでこの湖の水を干し、村人を毎年の苦しみから救ってやりたいと考えるようになりました。そこで小太郎は、母親の犀竜がかくれたといわれる仏崎観音様の裏山の洞穴へ行って、深い穴の底に向かって、毎年の洪水に苦しめられている村人の様子を語り、母親の犀竜にたすけを求めました。犀竜は、自分が支配している湖がなくなることはつらいことだけれども、自分の子供の願いをかなえてやりたいと考えました。やがて、洞穴からは黒雲が沸き上がりその中から巨大な犀竜が姿をあらわしました。犀竜は、その背中に小太郎をのせて、渦をまきながら湖をわたり東山の一番弱そうなところに沿って体をうちつけ、うろこを逆立て、大地をけずりとり、深い谷を掘ってゆきました。これは犀竜にとっても大変な仕事で、何日もかかって谷を掘り終り、千曲川の流れる善光寺平に出たときには、さすがの湖の主、犀竜も、血まみれになり、すっかり疲れはてていました。しかし、この水路のおかげで安曇盆地に満々とたたえられていた水は、とうとうと善光寺平へ流れこみ、千曲川と合流して信濃川となり、日

本海へとそくぐようになったのです。疲れはてた犀竜は背中の息子、小太郎にはげまされ、流れをさかのぼって仏崎へもどり、自分が支配していた湖が干上ってゆくのを見ながら、小太郎と一緒に、再び深い穴へもぐってしまいました。この泉小太郎親子の努力のおかげで、水のひいた安曇盆地は肥沃な耕地になり、村人は、その上に豊かな生活をきずくことができるようになりました。犀竜が掘ってくれたこの谷は、今でも竜の体の形にうねり曲っており、人々は「犀川」と呼んで、泉小太郎とその母親の犀竜への感謝の気持を忘れずに語り伝えているのです。

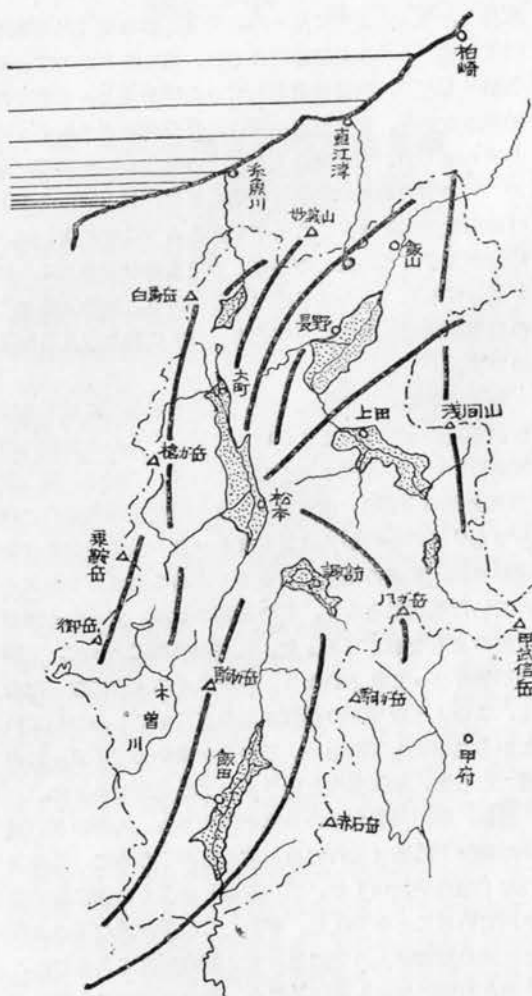
展望の素晴らしい岡の上で、安曇平を眼下に見下ろしながら聞かせて戴いたこの犀竜の話は、私の小学時代の記憶の中に、一番印象深く残っている。当時は、第二次世界大戦の寸前で、教室では乃木大将や広瀬中佐や、死んでもラッパを口からはなさなかった一兵卒の話などを聞かされ、お国のために命をさげることがばかり教えられていた私達にとって、この犀竜の話は、まったく別の世男のような感じであった。私が中学校に入って、土器や石器を拾ってあるいたり、石を集めるようになったのも、このような童話の感激が心のどこかにしみついていたからなのかも知れない。この話を聞かせて下さったのは、たしか、塚田先生という若い男の先生であった。

最近、柳田国男先生の全集が出版され、先生の永い誠実な御努力に魅せられて読み進んでゆくうちに、このような「竜の子民話」が、信州をはじめ広く全国に語りつがれていることを知った。また、この話が湖の主のような自然の精霊が人の姿になって人間の世界にあらわれ、人間との間に子をもうけること、その子が世にも稀な大仕事をするという類の説話と同じ系統のもので、日本に古くから伝わる最も普通にみられる話であることもわかった。私は、民話というものについて、深く考えたことがないので、こうした話が古い民族のなにをものかたっているのかを知る由もない。むしろ、私達は、このような民話を伝承する当事者の側であって、物語に感銘を受け、それをまた子や孫に語り伝えてゆくわけである。

最近のニュースによると、松谷みよ子という人の「竜の子太郎」という話が、アンデルセン賞をうけたという私達の郷土に伝わるこのような古い民話が、より多くの人々の心に感動をよび起したことをうれしくも思い、また、埋れていた民話を掘り起して、国際的な文学性にまで高めて下さった方に、心からお礼を申し上げたいとさえ思うのである。

2 龍の子民話と地質学

さて、私は地質学を勉強しているのであるが、この「竜の子民話」で、いくつか思い当ることがあってこの文を書き始めたのである。それは、この民話にでてくるような古い湖が、信州の各地に、いくつも存在した証拠が



(第2図) 先行性流路の上流で、湖があったかも知れない、上流の盆地(必ずしも証拠はなく推定図)
太線は土地の隆起する方向

あるということである。

大町付近では、今でも仁科三湖と呼ばれる湖があり、東西の山脈の間にはさまれた断層湖だと考えられている。これらの湖の岸边には、木崎湖の森城址や、中綱湖の笹(こうじ)原などに湖成層(湖の底に、泥や砂がたまってできた地層)の段丘が分布し、かつては今より20m以上も水面が高く、湖も広がったことをしめしている。

佐野坂峠の峠道から北に広がる四ヶ庄平を眺めると、四方を山で囲まれた典型的な盆地状をしている。この盆地や、南寄りの低地(飯田附近)には、今でも年中水がたまっている窪地があって、湿原となり、わずかではあるが泥炭層ができています。これは、西の山から運ばれてくる土砂で次第に埋め立てられてしまった古い湖の最後の姿である。このような古い湖のことを化石湖と呼ぶこともある。現在では、青木湖の水が佐野坂峠の下をしみ透って、姫川の源流になっている。(平林照雄(1955))

故郷の自然 P56)

もう少し広い地域をみまわしてみると、現在、盆地のような地形をしめしているところで、古い湖水の堆積物によって、その地域に、かつて確かに湖があったと推定される地域が沢山ある。

1960年夏、上田千曲高校の家庭科3年生は野外実習のとき、千曲川の河岸段丘を観察し、塩田平を流れる産川の河床に1.5m以上もの厚さで水平にかなりひろがる粘土層を見つけた。これはその後、粘土の中に含まれていた珪藻の化石などから、明らかに湖成層であることが確かめられた。この研究で、塩田平には、かつて丸い形の湖があったことが明らかにされた。(千曲高校家庭科3年生中沢諄子外21名(1961);小県郡塩田平の昔の湖(湖成層)について、長野県地学会報 No. 30 P12)

善光寺平北部の長丘々陵附近では、城山層、立ヶ花層と呼ばれる火山灰質の堆積物があり、その中の珪藻の化石から、これらも淡水性の湖成層であることが確かめられた。長野高校の富沢先生は、この古い湖を「古豊野湖」と名づけられ、このような湖と善光寺平のつき方を関連づけて研究されている。(富沢恒雄(1961)善光寺盆地北部長丘々陵附近の地質と地形、長野県地学会報 N 0. 31 P12~13)

諏訪湖地方では、現在天竜川へ注いでいる諏訪湖の水が、かつては東へ流れて甲府盆地へ流れていていたと考えられそれが八ヶ岳の火山噴出物によってせき止められたので天竜川へ流れてるようになったと考えられる。(河内晋平(1961)八ヶ岳火山列I, II地球科学 No. 55,56)この八ヶ岳噴出物によってせき止められたしばらくの間は、諏訪湖は今よりはるかに広くあふれた大きい湖となり、やっと天竜川への流れ口を作ったのであろう。

これらの出来事は、みんな今から数万年~数十万年前のことである。更にもう一まわり古い時代(百万年位前)の地層をみると、佐久地方に塩漬層群と呼ばれる広い湖成層があり、また、松本東方の美ヶ原高原にも湖成層が分布する。(平林照雄、田中邦雄、深志高校地学会(1961.)美ヶ原三城地域の湖成層に関して、長野県地学会報 No.32 P13~15)これらは塩漬層とか、旧美ヶ原湖とも呼ぶべきもので、これらの湖の時代は八ヶ岳、霧ヶ峰などの火山が激しく活動しており、正に「湖と火山活動」の時代であった。塩漬層の堆積した頃にはすでに日本の各地に、最も古い石器時代の人類が住みついており、中綱湖や木崎湖の古い湖成層の上では、縄文文化をもった人々が生活していたのである。

長野県の地形図をみると、大きな河川の中流で、1度山地を通りぬけ、その上流に山間盆地を作っている例が多い。(第1図)。これらの河川は、山地を横切る部分で非常にせまくなりながらも無理してどうしても山地を通りぬけてゆく。犀川と仁科山脈の場合を例にとっても

よくわかる。後にものべるように、仁科山脈が高まり始めたのは、旧美ヶ原湖などの時代は終わってしまったからの極く最近のことである。

その頃高瀬川などの西から流れる沢山の川は、仁科山脈を真直に横切って東へ流れていたが、次第に隆起してくる河底(東山はもとのまゝでも、安曇盆地が相対的に沈降してもよい。)を一生懸命に下へけずりこみながら自分の流路を変えまいとした。しかし、ついに山地の隆起に負けてしまって、流路は南北方向になり、仁科山脈中で隆起の一番弱かった現在の犀川の位置へと追いつめられてしまったのである。それでもなお、松本平の河川が仁科山脈と筑摩山脈を越えて善光寺平へ流れてるためには、隆起する山地との激しい斗いがあり、犀川河岸のいくつかの段丘や、山清路付近のまがりくねった流路の様子にも、そのあとがうかがえるのである。このように山地の隆起部を敢えて横切って流れる川のことを、先行性流路という(第2図)。長野県の山間盆地のほとんどすべては、このような先行性流路の上流に分布するものである。この山地の隆起と、川の侵蝕との斗いで、後者が負けるようなことがあると、川は諏訪湖の場合のように、別の方向へ逃げ路を求めると、または、四ヶ庄盆地のように一度湖となって水面を高め、山あいの低地からあふれ出すことになる。このような場合に、上流部にはしばらくの間かなり大きな湖ができて、湖成層が堆積したわけである。

松本盆地も、伝説では全感が広い湖であったとされているが、地質的な証拠からは、そんなに大きな湖であったとは考えられない。しかし、すでにのべたように、アルプスから流れ出した大きな川は、その昔、東の山地を真直に流れこえて善光寺平へ流れていた。その証拠に、今でも、仁科山脈の鞍部には高瀬川と同じような河原の礫がのっている。(小林国夫、平林照雄(1955)松本盆地周辺のいわゆる山砂利について、地質雑誌Vol. 61, No. 712) その頃、アルプスの嶺近くには、白く光る水河がかゝっており、冷い洪水が猛烈な勢で押し出してくることがあったであろう。

このように、今から百万年前頃から現在までの間に、私達の故郷の自然は急速に現在の様子に近ずき、その間に、山間盆地のいくつかには、水が溢れて湖になったこともあった。こうした遠い昔のできごとが、その湖の畔で暮らしていた文字も言葉もない人々から、どうやってか知らないけれど、伝え継がれてきて、今、「竜の子民話」の中にその名残りをとゞめておくとすれば、非常に興味深いことである。

湖の主の話、その落し種の賢い若者の大事業の話などは、民族の古い自然に対する信仰や、感じ方に根ざしているもので、私が上に書いたようなことゝは無関係なことであるかも知れない。しかし、上述のうな旧湖沼

の問題は、地質学の重要な課題であり、それぞれの地方に暮らしておられる高校生や、先生方によって着々と研究されている。民族学をなさる人達とも、こんな点で、楽しく話し合えるようになれば、楽しいことだろうと思う

3 郷土の科学

地球の歴史の中で、最近の百万年間は第四紀と呼ばれ上にのべたようなさまざまな事件は、ほとんどこの期間に起ったものであり、それらの研究を第四紀学と呼んでいる。このような新しい時代の地質現象の研究成果は橋をかけたなり、トンネルやダムをつくったり、時には湖の干拓をしたりするような、私達の身近な自然利用の大切な基礎資料なのである。また、この時代は、私達人類が初めて地上で活動するようになった時代でもあり、自然の変化過程が、人間の出現によって、それ以前とはまったく異った様式にかえられてしまうこともあるほど人間の出現は、地球の歴史の中でも重要なことである。そんなわけで、第四紀の研究は、地質学や古生物学ばかりではなく、人類学、考古学、生物学、土壌学、気象学など、あらゆる分野の研究者が協力して研究を進めてゆかなければ、正しい理解に到達できない。従来、大学などで研究や学問にたずさわっていた人々は、自分専門の狭い分野にたてこもって、一国一城の主の如く孤立してきたのが一般であった。しかし、第四紀学の例にもみられるように、これからの科学は、自然を分析的にばかりでなく、総合的に理解する方向に進みはじめており、研究者も自分の専門の枠をのりこえて、互に協力し合わなくてはならないわけである。また、私がこゝで扱ったような地域毎の詳細な研究は、その土地に住みついている知識人や高校生、青年達の手でこそ、より正確に力強く押し進められるものであると思う。

私はこの文で、はじめに長々と「犀竜の話」を書いたそれは、このような山村に伝わる古い民話の中にさえも第四紀学の問題点の示唆が秘められているように思われたからである。民話の中にでてくる自然の状態が、いつも実際にあったことであるというのではないが、「竜の子民話」が信州の土地に生れるべき必然性が、第四紀学によって明らかにされるかも知れないと考えたからである。

そしてまた、私達はこの民話をとおして、遠い私達の祖先が、自然に対してどのような気持をもって生活していたか、その生活の中での苦しさをどんな風に解決できたらいゝなあと望んでいたかを知ることができる。大水で年毎に苦しんでいた人々が、何とかその湖を干してしまいたいという願いは、現在私達が台風のために感ずるものと同じであり、沼や湖を干拓したり、川の流路をかえたりして、積極的に自然を改造しようとする意欲に連るものである。

南アルプス植物雑感

中 村 武 久

4 北岳は南ア一の植物豊庫

南アルプスが植物の種類に富んでいることは前号に述べた通りであるが、それらの種類は南アのどこの山にもあるというのではなく、この山系全域のものを数えればということであって、南アルプス連山の一つ一つの山域について眺めてみるとその数はいうまでもなく各山各様で豊富な山もあれば貧弱な山もある。といて果してどの山がもっともその植物に富み、どの山がもっとも貧弱であるかという、それはなかなか容易に結論するわけにはいかない。なぜなら過去南アルプスの各山岳についてそれ程詳しい植物調査が行われたかという、残念ながら、国立公園として発足する今日においても南アの植物は決して十分に解明されたとはいえないのである。

これを何とかしようという野心もなくはないが、ともかく近年登山者の数を増す南アルプスとその自然な姿を少しでも傷められないうちにどうしてもみておきたいと思い、数年前より毎年南アルプスに足をはこび、その植物に触れてきたが、植物全てということになると、とても5年や10年ではその実態をつかむまでにはいかな。

しかし、たまたま私が専門のシダ植物について、南ア各山域、殊に2000m以上の高山帯ないし亜高山帯上部のシダ植物を調査してみたが、特に各山域のものをその数について比較してみると甚だおもしろい結果が現われた。即ち北の駒ヶ岳では11種、仙丈岳24種、北岳25種、塩見岳16種、荒川岳15種、赤石岳9種、聖岳19種となり、この数はそのままその山岳のフロアの

貧富を物語っていると考えてよいようである。というわけは一般に高山におけるシダ植物の生態は、気候的な条件や地史的条件はいうまでもないが、殊に他の植物群落などと関係が深く、例えばハイマツの下を好む要素(種類)、比較的湿った所の背の高い草叢を好むもの等々、その生態要素が割合明瞭であるので、これら各山岳の種類についてその内訳をみると成程それらの裏づけがもっと強くなってくる。例えば北岳ではかん木下生要素11、岩上要素9、乾草原要素3、中ないしやや湿性草原要素2となり、これはハイマツやミヤマハシノキなどのかん木もよく発達した岩場もかなり多く、そして乾性のお花畑、また中性ないしやや湿性のお花畑も発達していることを如実に示している。

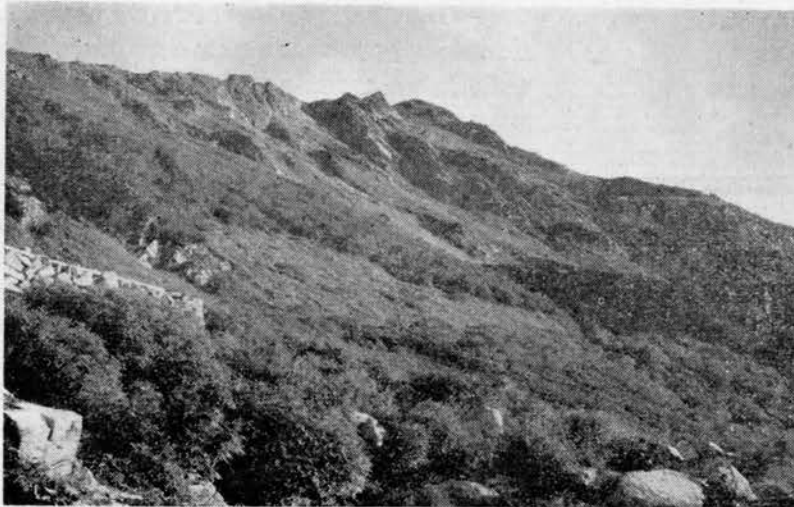
ところが一方数の少ない赤石岳では、その内訳が2・4・3・0となり、いわゆる草原、お花畑がまことに貧弱であることを示している。また実際に赤石岳に登ってみれば、大聖寺平辺りから小赤石、そして赤石岳頂上に至る間はその鞍部に所々小さな草原がみられるがその殆んどは礫地で、ウラシマツツジ、イワツメクサ、コバノコゴメグサなどその種類は限られたものである。

このようにして南アルプスの各山岳の植物を眺めてみると、やはり北岳がその第一人者であり、おそらく南ア全域産の種類約90%は北岳でみられるといつてよいと思う。しかも種類の点からだけでなく、北岳では植生の状態も極めてよく、北アルプスの白馬岳に決して劣らない規模の大きなお花畑もみられる。北岳小屋から頂上に連なる広大な斜面、また頂上から北側に続く草すべりそして若いアルピニストのスリルをそそるバットレス、

そこにはきっとまだ人の目に触れていない珍奇な植物も影を潜めていることだろう。北岳はまさに南アルプス第一の高山植物の豊庫である。

願わくはこれらの美しい自然が無知なる人の手によって傷みつけられぬよう、そしてシダ植物ならぬ人の心の休み得る環境として残しておきたいものだ。

(山博学芸員・東京農大
第一高校教諭)

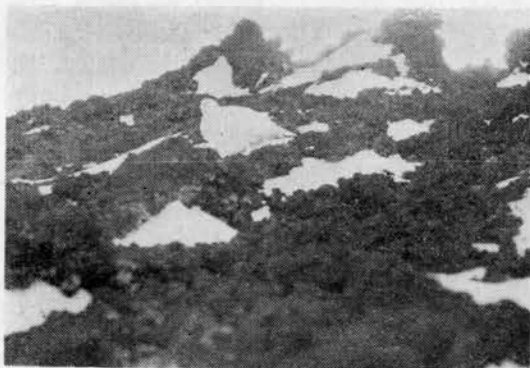


北岳小屋より北岳頂上

富士山のライチョウ

中田友三

北アルプス白馬岳のライチョウが富士山に移殖された
と聞き、はなたれた場所も知らぬままに、私はライチ
ウをさがしはじめたのである。そして36年5月中旬、初
めて天狗の庭で1羽見つけ、その年の11月下旬小御岳神
社裏手で足跡を、翌37年6月中旬、ふよう荘上部で大量
の糞をみついている。11月下旬、ふよう荘上部 300m付
近に幕営、訓練の往復を利用して付近を歩き、新雪上に
足跡をはっきり見つけ、ほぼ確認したものついに姿は
見かけることはできなかつた。2日目13時20分頃数人の
会員によって発見され撮影したのがこの写真である。(
撮影者 園田努氏)



ここで最初の発見地から見て、天狗の庭から小御岳流
しの間が生息地とみている。

なかでも神社裏手がかっこうの場所と思っていたとこ
ろ、最近伐材がひどく見込みがない。天狗の庭方面を中
心に生活圏を広げて行くのではなかろうかと思う。しか
しこも道路工事が進み、飯場も相当上部まででき、ト
ラック等の運行がはげしくなれば、近い将来ライチョウ
の安住の地はなくなって来るものと思われ、せつかく移
殖したライチョウの全滅も考えられる。

1日も早く各関係方面で保護対策をたてられ、仲間が
年々増し人々の目を楽しませてくれる様にしていだき
たいものである。

撮影当日付近には(ふよう荘上部300m付近) 天幕15
、6張りあり、地形から云うとまだかん木帯で50mほど
先から樹木なく熔岩帯となり、ゆるい斜面が続いている
発見地はこの斜面の小高い熔岩上であり、かん木帯の限
界になり、昨日まで天幕1張りがあつた。足跡を見つ
けたのはこの平行線を天狗の庭に進んだ所で、雪も多く地
形も平坦に近い。5月に糞を見つけた所はこれより下部
で、ふよう荘に近くこの辺一帯は特にコケモモの非常に

多いところであつた。

小御岳神社付近

ハクサンジャクナゲ 多く ヤグルマソウ マイズルソ
ウ ツバメオモト ヤマホタルブクロ キソチドリ コ
ケモモ ヒメシャジン

ふよう荘～御庭間

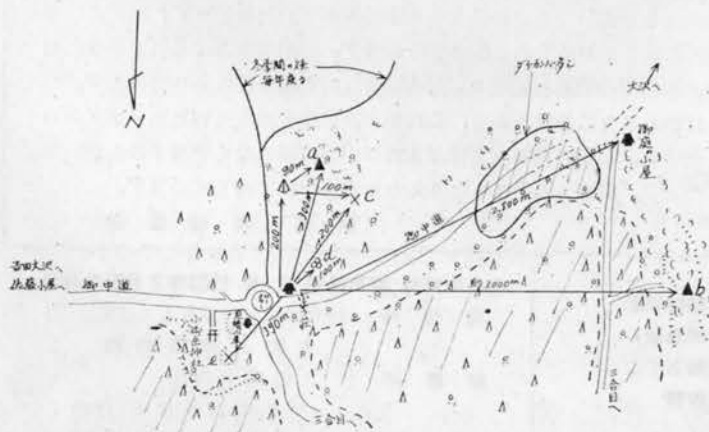
ダケカンバ ジャクナゲ ミヤマハンノキ ツバメオ
モト コケモモ ベニバナイチャクソウ フジハタザオ
ムラサキモメンズル イワオオギ ミヤマハンショウズ
ル タカネツメクサ オオイタドリ ミネヤナギ ミヤ
マオトコヨモギ

御庭小屋付近

特に目につくのはダケカバの多いこと カラマツ散在
ハクサンジャクナゲ ハナヒリノキ アカモノ コケモ
モ

奥庭付近

ミヤマハンノキ ダケカンバ ハクサンジャクナゲ
モミ ツガ ゴゼンタチバナ マイズルソウ コケモモ
等 (溪峰山岳会長)

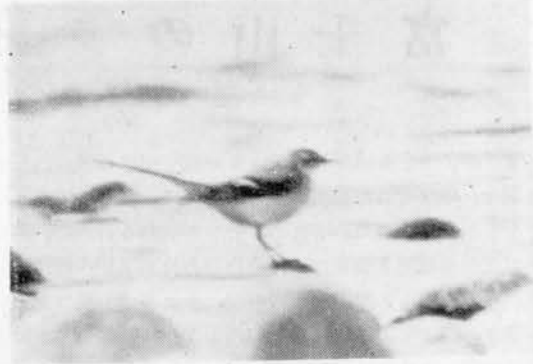


- X 足跡
 - 糞
 - ▲ 発見地
 - △ 幕営地
 - 浴場
 - フタバノ梢(時性)
 - 主針葉樹林帯
- a - 37.11.25
 - b - 36.5
 - c - 37.11.24
 - d - 37.6.中
 - e - 36.1

冬のキセキレイ

長 沢 修 介

1月中は毎日雪が降り例年のように土手や川河の水辺に集っていた小鳥達も今年の大雪は、すっかり食べ物を拾う場所が少なくなってしまいそのため動物質を食べる鳥はわずかのカラ類を残して殆んどが雪の少ない地方に移ってしまった。毎年私の家の附近で越冬するモズでさえ今年は1羽も姿を見せない。又大町市内の中心街でも毎年1羽のキセキレイが越冬したが今年はすっかり姿を消してしまった。2月に入ってこの附近で最も近い犀川の辺りへこれ等漂鳥の冬の生活をのそぎに行き見て。何処に雪があるのかと思われる位で川辺には沢山のハシブトガラスが集ってその附近の水辺にはセグロセキレイがもう春の囀りをしていた。そんな中にまじって2~3



羽のキセキレイがチンタタと細い声で鳴きながら飛びあっている姿は夏季にはずっと身近に黄色の胸を張って尾を思いきり上下に振り大声で囀るいきな姿を見知っているせいか何か心淋しい思いであった。

ライチョウ調査等に当る事になる。

○本館の館長は今まで教育長が兼任であったが専任館長が定った。市教育委員会社会教育係、藤巻厚美氏(33)
○三沢巖(60)山岳博物館長・市教育長はかねてから病氣療養中であつたが1月25日退職された。氏は英語、音楽にたんのうで展示替中ウエストーン氏からの手紙を見つけて職員に和訳してくれたものであつた。

博物館だより

○当博物館創設より本館の下等植物部門担当の平林昭一郎学芸員(35)は1月28日付で市立大町病院に転出(博物館勤務12年)、下等植物部門担当学芸員は1名のみであつたのでその転出が惜しまれている。又同日付で動物部門担当の千葉彬司学芸員補も教育委員会社会教育係を兼ねて勤務する事になり、実質的に学芸員1名減で冬期

館長就任に当って

山岳博物館は戦後の混乱の中にあつて、自分たちの郷土や自然を知ろうとする若い人たちの地道な活動の中から生れ育てられてきたものです。そしていまみるように発展し全国的にもその存在が認められるようになりました。山岳博物館は今まで、市民や小中学生を対象に動植物、地学、民俗、考古の各分野に亘って研究、調査、普及活動に務めてきましたが、博物館を充実し、今までよりも更に魅力あるものにするためには、優れた資料を豊富に整備しなければなりません。そのためには学究的な職員の絶えまぬ努力が必要です。

又観やすく、解りやすく、来やすい展示の方法も研究することが必要だと思ひます。

次に、楽しく、親しみやすい場所とするため、付属施設の動物園や遊園地的施設も整備して総合的に運営してゆくことが極めて大切だと思ひます。いま動物園は3箇所に分かれていて、不便であるばかりでなく、市民のみならずにも迷惑をかけていますが今後は山博の裏山の一箇所に集めて管理の万全と集約利用が出来るようにしたいと思ひます。又自然園ですが、黒部のダム工事が6月に終れば観光客も来るので、山岳ホール(山博分室)を中心に動物園の計画を盛り込んで具体的に進めることになります。

木崎の白鳥の湖、葛の野猿の飼づけの問題も研究して実功あるよう着実に進めたいと思ひます。自然の中で猿、カモシカ、白鳥、ライ鳥が自由に見れるようにすることは私たちの夢です。山岳博物館はこれからやらなければならない仕事が多量にありますが、市財政の困窮と相俟って本当に苦しい立場に立たされています。

しかし運営等も市民の納得のいくように改めるところは改めて、これからの仕事を進めたいと思ひますので注文や意見があつたらどしどしし出てください。市民の理解と支持があれば山博は限りなく発展すると思ひます。山博へ市民のみなさんのお出掛けをお待ひしています。

私は思う

(館長 藤巻厚美)

お願い、本紙の購読ご希望の方は1カ年購読料300円(郵送料とも)を現金書留または郵便為替、郵便切手で長野県大町市、大町山岳博物館あてご送金下さい。大町山岳博物館

山と博物館 第8巻第2号 1963年2月25日発行
発行所 長野県大町市TEL(大町)211
大町山岳博物館
印刷所 大町市上仲町
信州印刷大町工場